

学びの源泉 三谷 宏治

第 34 号 台風 9 号東京直撃！

#F 小学校、「水害」避難所開設！

9月6日夜、自宅の電話が鳴った。

私が PTA 会長を務める、地元の区立小学校からだ。校長先生が緊張感を含んだ声で私に伝える。

「台風に備えて、われわれは学校に泊まり込みますので」

東京を直撃すべく北に進路をとった台風 9 号が、まさにそこまで迫ってきていた。F 町は多摩川のお膝元。普段から流量は豊かだが、年に一二度は水深が数倍になり中洲が水没するときがある。実際、1974 年には数 km 上流の狛江市で堤防が決壊し、民家 19 戸が流出してもいる。

現状のままなら、もっと桁違いに大きな水害も、起こりえる。国土交通省は「200 年に 1 回程度起こる大雨で洪水が発生し堤防が決壊した場合、氾濫が想定される面積は約 9,000ha、被害額は約 10 兆 2 千億円」と推定している。

間違うなかれ、200 年後、ではない。200 年に一度程度、だ。一生の間にこの災害に遭う確率は 1/3 以上なのだ。

川沿いの住人にとって「水害」は遠いどこかの話ではなく、「そこにある危機」なのだ。

雨は関東山間部で夜通し降り続き、急流である多摩川の水位は即座に上昇する。あっという間に何十面もの野球場、サッカー場、テニスコートが濁流の下に消え、憩いの場である小高い丘も、大部分が水没。

ついに翌朝 7 日 5 時、F 小学校に避難所が開設され、6 時 20 分には地元住人 1500 人に対して、避

難勧告が発令された。

この時の最高水位は 8.6 メートル。堤防決壊まであと 90cm だった。

幸いなことに雨は早くに上がり、出されていた大雨・波浪・洪水警報なども次々解除され、9 時 54 分には避難勧告も解除となった。校庭に陣取っていた NHK の中継車も引き上げ、新聞記者たちも社へと戻っていく。

10 時過ぎには小学校でも子どもたちの登校が始まり、その日の内に学校も平常さを取り戻した。

#災害から学ぶべきこと

台風 9 号の被害が東北地方に移った翌朝 8 日、朝日新聞は大きく紙面を割いて報道した。

「避難所利用 7 人のみ 多摩川増水」

そうなのだ。

準備万端の広い体育館に、避難してきたのはたった 7 人、3 家族。対象の 0.5%であった。

もちろん、小学校以外に避難した人々もいる。数百メートル離れた高台にある知人宅に移った、という人も多い。

しかし、殆どの人たちはやはり、自宅で様子を見ていた。

「これくらいなら大丈夫だ」と。

本当の災害時に、逃げ遅れるのは災害未経験者ではなく経験者だ。

「あの時も大丈夫だった」「あの雨でもうちの裏山は崩れなかった」

2005年の台風14号は、宮崎県内で死者13人、住宅被害9000棟の被害を出した。特に大淀川沿いの旧高岡町では全戸数の2割、1168棟が被害にあった。この地域は過去も度々水害に遭っている。

しかし、この時、この地域で出された避難勧告に対し、多くの人が応じなかった。

特に『過去の被災経験者』では63%が無視。『未経験者』の90%がちゃんと避難した¹のに、だ。

災害経験は、災害リスクの適正な評価に繋がらない。ヒトはリスクを必ず過小評価するように、なる。

あんな時でも自分は生き残った、とか、もう暫くは遭わないだろうとか・・・

そういった確率的には何の意味もないことを、思い込む。己に都合の悪い情報を無視したり過小に評価したりする。

これこそが「正常化の偏見 (nomalcy bias)」と言われるものだ。災害を生き残ったものが学ばなくてはならないことの第一は、これだ。

#水辺で地震にあったらどうする？

海辺で、もしくは川辺で地震にあった。震度3程度としよう。慌てはするが、大したことはない。

地震が収まった後、さて、どうする？

大抵の人は、テレビやラジオを付けるだろう。携帯電話で友人や家族に連絡する人もいるかも知れない。そっちは大丈夫？ テレビでなんか言ってない？

取るべき行動としては、どれも不正解。

まずは津波を恐れて、すぐに海岸から遠ざかるべきだ。テレビでの警報を待っている間に、津波はやってくる。

川だって危ない。上流のダムが決壊するかも知れない。海岸近くなら津波が遡上してくるかも知れない。

2003年5月、宮城県を大きな揺れが襲った。気仙沼市では震度5強の記録した宮城県沖地震だ。

一帯は、言わずと知れた三陸海岸。津波で1896年には2万人以上、1933年には3千人の死者を出している。

でもヒトは、避難しなかった。

即座に避難したのはわずかに8%²。残りは避難でなく情報収集行動に走った。テレビにかじりつき、自らに迫る(かもしれない)大災害の予告情報(=津波警報)をひたすら待っていたのだ。

なかでも最悪なのは、沿岸住民の4割が「海の様子を見に行っただ」こと。

たしかに昔は引き潮の後に津波が来た。でも今度は違うかも知れない。違ったら、一体どうするつもりだったのだろうか。津波は遠洋から時速800km³で迫ってくるというのに。

リスクに対して、ヒトはこれ程に大きく読み間違える。

ビジネスの世界でも、同じ。

これを他山の石と出来るか、対岸の火事とするか。それもヒト、各々次第であろう。

初出：CAREERING. 2007/11/01

¹ 宮崎大学 村上啓介 助教授 調査

² 群馬大学 片田敏隆 助教授 調査

³ 津波の伝播速度は水深5000mで時速800km、100mで時速110km、となる。